

東京外国語大学

日本研究教育年報 20

(2015 年度版)

<論文>

- 「山田先生は優しい人だ」構文に関する一考察—「山田先生は優しい」構文と比較しながら—
..... 黄 允實 1
- やさしい日本語ニュース語彙の意味分野と語の難度—高頻度語彙を対象に—
..... 近藤 めぐみ 19
- 「秋の夕暮」の歌の形成における古今集の役割—悲哀寂寥感の源泉を探って—
..... 金 中 39
- 帝国民とアイデンティティ—永井荷風『支那人』 竹森 帆理 57
- 「新時代ニューエイジ」の死と詩—大江健三郎『新しい人よ眼ざめよ』論 南 徹貞 75

<研究ノート>

- 「評価形容詞」の設定—「思ウ」認識動詞構文による試案— 張 舒鵬 93
- 映像素材の日本語教育への活用のための数量的分析枠組みの提示とその課題—アニメーション
『花とアリス殺人事件』を例に— 臼井 直也・清水 美帆 105

<特集> 文化の交通

- 小さなロシア 樫本 るい 119
- 奈良・平安前期における日本の新羅、渤海使との漢詩交流—分韻詩から次韻詩へ—
..... 顧 姍姍 129
- 芥川とチェーホフの関連性—「疑惑」の位置づけについての試論— 溝渕 園子 143
- 健康長寿社会アジアの実現と日本の経験知に対する期待 金 惠媛 149

<報告・卒業生短信>

- 日本専攻30周年を祝う会の報告 柴田 勝二 165
- 日本語学科30周年記念大会に参加して 江頭 由美 166
- 人生の転換を迎えて思うこと—研究, 育児, 人とのつながり— 志波 彩子 171
- 日本語教師から中国語教師へ 張 盛開 178
- ぼくと日本語 **モハメド** オマル アブディン 187
- made in じゃば科 伊勢田 七津美 190

<彙報>

- 2015年度開講科目一覧 195
- 2015年度修士論文—題目・要旨— 200
- 2015年度卒業論文—題目・要旨— 208
- 編集後記 227
- 執筆者一覧・投稿規定 228

2016 年（平成 28 年）3 月 31 日

編集・発行 東京外国語大学 日 本 専 攻
東京都府中市朝日町 3-11-1
〒183-8534 TEL 042 (330) 5349

印 刷 三鈴印刷株式会社
東京都千代田区神田神保町 2-32-1
〒101-0051 TEL 03 (5276) 0811 (代)

〈論文〉

「山田先生は優しい人だ」構文に関する一考察

—「山田先生は優しい」構文と比較しながら—

黄 允 實

1. はじめに

文は述語に来る品詞によって、動詞述語文、形容詞述語文、名詞述語文に分類することができる。このうち、名詞述語文には次のようなものがある。

- 1) 山田さんは先生だ。(名詞述語文)
- 2) 山田先生は優しい人だ。(述語構造が「形容詞＋名詞ダ」の名詞述語文)

1)のように名詞だけの単純名詞述語文もあれば、2)のように名詞が飾り成分(形容詞)と組み合わせあって、「形容詞＋名詞ダ」という述語構造になる名詞述語文もある。後者の文は、「山田先生は人だ」だけでは文が意味を成さず、実質的な意味は形容詞「優しい」が担っており、文の全体の意味としては、3)の形容詞述語文のように、山田先生に対して「優しい」という<特性>を意義付ける文になると言える。

- 3) 山田先生は優しい。(形容詞述語文)

しかしながら、二つの文が同じく主語の<特性>を表しているとしても、一方は述語に名詞を含んでいるが、他方は含んでおらず、本質的に述語構造が異なっており、両者にはなんらかの違いがあるのではないかと考えられる。そこで、本稿では「形容詞＋名詞ダ」文の特徴を探るために、述語構造の特徴を観察し、主語の示し方において「形容詞＋名詞ダ」文と形容詞述語文との比較を試みることにする。

2. 先行研究

名詞述語文に関し、これまで様々な研究がなされてきたが、その中で、形容詞述語文と「形容詞＋名詞ダ」を比較した主な研究として新屋映子(2009)を取り上げる。

新屋映子(2009:30-33)では、形容詞述語の意味機能には、性質規定、状態叙述、評価があり、名詞述語の意味機能には、類別、同定、名称提示、性質規定、状態叙述、評価、動態叙述¹があると述べている。このうち、両者は「性質規定、状態叙述、評価」という共

¹ 新屋映子(2009)では、名詞述語の意味機能について「類別、同定、名称提示、性質規定、状態叙述、評価、動態叙述」のような用語を用いている。「類別」は事物の種類を表し、「同定」は主語の指示対象と

通の意味機能（太字）を持っていると、指摘している。

<表 1> 形容詞述語、名詞述語の意味機能（新屋映子（2009:33）の表 1 より）

意味機能	形容詞述語文	名詞述語文
類別		珊瑚ハ動物ダ
同定		アノ子ハ息子ノ太郎ダ
名称提示		コノ花ハ“コーレリア”デス
性質規定	氷ハ冷タイ	ソノ話ハ事実ダ 彼ハオトナシイ性格ダ
状態叙述	風ガ強い	今コノゲームガブームダ 今経済ハ危機的ナ状態ダ
評価	ソノ方法ハマズイ	ソレハ彼ノ能力ノ問題ダ
動態叙述		彼ハ明日出発ダ

なお、形容詞述語と名詞述語の性質規定について、以下のような例を挙げ、説明をしている。（下線は原著のもの）

- a. あの子は素直だ。
b. あの子は素直な子だ。 （新屋映子（2009:34）より）

a は形容詞文で、b は名詞文であるが、「あの子」の性質を表しているという意味の面では実質的に同じである。そのため、名詞述語はしばしば形容詞述語と同等の意味機能で用いられ、両者は互換性の高いことが多いと述べている。しかし、形容詞文の性質規定が形容詞自体によるものであるのに対し、名詞文のそれは述語名詞の概念を限定、類別するという操作を介した性質規定であると述べている（pp.34-35）。

以上の指摘を踏まえて、本稿では a、b のように主語が文中に現れる文を中心に、主語の示し方に注目し、「形容詞²+名詞ダ」文と形容詞述語文の特徴を確認しつつ比較・考察することにする。

3. 研究対象及び研究方法

3.1. 研究対象

新屋映子（2009:33）には、「名詞を述語とする性質規定文の形」として次のような文が挙げられている。

- ① ソノ話ハ事実ダ
② アノ子ハ素直ナ子ダ

述語の指示対象とが一致することを表す。「名称提示」は事物の内実には言及せず名称だけを表す用法である。また、「性質規定」は時間に左右されない事物の恒常的性質を表し、「状態叙述」は時間的、空間的に局在する事物（表現主体の内面を含む）の状態を表し、「評価」は自他の行動や事象に対する話し手の評価（狭義）を表す。「動態叙述」は事物の動きや変化を表すものである、と説明している。本稿では、新屋映子（同）の「類別」「性質規定、評価」「状態叙述」「動態叙述」を、それぞれ佐藤里美（1997）や工藤真由美（2012）などが用いている用語「質」「特性」「状態」「運動」にほぼ相当するものとして捉えている。

² 本稿で「形容詞」と呼ぶものは学校文法でいう「形容詞」と「形容動詞」の両方を指す。

③ 彼ハ太陽ノヨウナ明ルサダ

④ 彼ハオトナシイ性格ダ

⑤ 彼ハ熊ト格闘シタ男ダ

以上はいずれも性質規定であるが、意味構造はすべて異なっており、ほかにもさまざまなパターンがあるとしている。本稿では、このうち、②の「素直ナ子ダ」のように述語構造が「形容詞＋名詞ダ」である文（以下、「形容詞＋名詞ダ」文と記す）を対象に、形容詞述語文との比較を試みる。

また、次のように人やものの部分や側面を表す語（高橋太郎（1975）のいう「部分語」、「側面語」）が、後接する形容詞とあいまって全体で「特性」を表す文も対象に入れる。

（1）「班長は、人情に篤い人だ。退官した先輩や異動した部下にも必ず年賀状を出すような人だ。人の気持ちを大切にする人なんだよ。」（同期:66）

なお、本論文の研究対象は文末に「のだ／んだ」のついていない、非過去形の述語に限る³。

3.2. 研究方法

用例は主として文庫本と単行本の現代小説や随筆の会話文⁴から手作業で採集したが、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）を用いて採集した用例も若干含まれている。これらの用例をもって、まず「形容詞＋名詞ダ」文の主語名詞⁵と述語名詞との関係など、述語構造について観察した後、主語の示し方における両形式の特徴を探ることにする。本稿では「形容詞＋名詞ダ」という述語構造の特徴が、主語を提示する際にどのように現れるのかを調べるため、採集したデータを主語が文中に現れるか、現れないかに大別し、新屋映子（2009）の例a、bのように主語が文中に現れる用例を対象とし、分析を行う。

主語の示し方においては、主語に来る名詞を大きく、個別・具体的なものと一般・総称的なものとに分けて考察を行うが、二つに分ける基準は次の通りである。

まず、本稿でいう個別・具体的な主語名詞というのは、文の中で一つ一つの個別かつ特定の人、物、場所、出来事などを指す。例えば、例（2）のように、特定の名前を指名し

³ 「のだ／んだ」のついた次の例を見ると、bのように「のだ／んだ」のない文に置き換えると不自然になるため、主語を表示するのに「ってのは」を用いるのは文末の「のだ／んだ」によるものと考えられる。本稿の目的は形容詞述語文や「形容詞＋名詞ダ」文の特徴を探ることにあるため、文末に「のだ／んだ」のついていない例は対象外とする。

a. 「あんな豪邸に住んでいるなんて、どうせ、父親の仕事はろくなものじゃねえだろう」
「豪邸というわけではないですよ」「偉そうな奴ってのは、ずるいんだよ」と彼は、ここにいない何者かに恨みを抱いているようでもあった。（オー！：294）

b. ?「偉そうな奴ってのは、ずるい」

用例によっては、主語の示し方と「のだ／んだ」とが関係のない例や、「のだ／んだ」をとっても違いが見られない例もあるだろうが、今回は対象に入れなかった。これに関しては「～ものだ」「～ことだ」や名詞述語文との関係を含め、今後さらに考察が必要であると思われる。

⁴ 地の文における特徴については、稿を改めて論じたい。

⁵ 本稿での主語名詞は、単純名詞以外に名詞句、名詞節のようなものが主語になるものも含む。

たり、例 (3) の「こちら」のようにいわゆる指示詞を使って特定の場所などを指すものである。(以下、主語名詞は太字)

(2) 「**健太郎君**は、ずいぶんと明るい子ですね」(略)

「あいつは勉強は駄目だが、サッカーは上手い」(グラス:212)

(3) 「この窓の方角は？」(略)「北西になります。(略) こちらはこの時間から日が沈むまで、よく日のあたる**明るい部屋**です」(部屋:75)

なお、次のように特定の地名を指す場合も個別的な主語名詞として扱っている。

(4) 「**シンガポール**は面白いところよ。食事もおいしい」(色彩:101)

一方、一般・総称的な主語名詞というのは、特定の人、物、場所などではなく、「人間、女性、海、山、夏、冬、旅行、人生、自由、世の中」などのような一般的な名詞を指す。

(5) 「自然を守りたいんです。特に海を」(略)「海を守るとはどういうことなのかな。

海は人間に守ってもらわなきゃならないほど**脆弱なもの**だろうか」(真夏:45)

(6) 「自由って、いいものですか」(略)「今の世の中、あたしたちを拘束するなんていう、責任っぽいこと、誰もしてくれないのよ」「はあ」

「自由って、いやなものよね」(風花:138)

但し、次の例のように、一般名詞「自然」「夏」が「日本」による修飾を受けて、文中で特定のものとして限定される場合、このような主語は、個別的な主語名詞として分類した⁶。

(7) 「この自然は、なんだか、力が強すぎて、もしも自分が弱っている時だったら、強烈すぎて、胸焼けがしてくるようだろうね。」(略)「日本の自然と全然違う。」

「日本の自然は、もっと線が細いよ。」(南米:157,158)

(8) 「いいなあ、ほんと**日本の夏**って」「僕は、もう少し涼しい方が良いと思う」郡司は言った、「北海道とか、スイスの夏が羨ましい」(カクレ:202)

以下では、このような「形容詞＋名詞ダ」文の主語名詞と述語名詞との関係や形容詞の意味と述語構造との関係について観察し、主語の示し方における形容詞述語文との違いについて考察を行う。

4. 考察

4.1. 「山田先生は優しい人だ」構文の述語構造に見られる特徴

4.1.1. 主語名詞と述語名詞との関係

本節では、「形容詞＋名詞ダ」文における、主語名詞と述語名詞との関係について観察する。この構文は、主語の特性を形容詞の語彙的な意味で表しており、述語名詞は実質的には意味を持たない。すなわち、構文上述語には基本的に主語名詞より上位概念の名詞(上

⁶ 今回はこのような基準で考察を行ったが、主語の指すものが個別・具体的なものか一般・総称的なものかというのは文全体の叙述内容によって決まることが多いようである。これについてはまだまだ考察が必要であると思われる。

位語)が来るようになる⁷。

まず、主語が個別・具体的なものから見てみると、主語名詞が人名詞であれば、「人、人間、男、女、子、奴」など、モノ名詞であれば、「もの」、コト名詞であれば、「こと」、場所名詞であれば「ところ」などが述語名詞になる。まず、人名詞である。

(9)「私はとても平凡な人間です。いや、平凡以上です。頭もはげかけているし、おなかも出ているし、先月40歳になりました。」(神:170)

(10)「彼女は髪の長い、物静かな女の子です。顔は風の谷のナウシカを少し虚弱にしたような感じで、性格は明るく、ずっとクラス委員をしていました」(世界:21,22)

主語名詞と述語名詞の関係から見ると、主語名詞と述語名詞は包摂関係にあり、述語名詞は実質的な意味を持たない。すなわち、例(9)(10)は「私は人間だ」「彼女は女の子だ」ということを言いたいわけではなく、「平凡だ」「物静かだ」ということを言いたいのであり、「形容詞+名詞ダ」全体が述語として機能しているのである。

なお、次のような物、場所などを表す場合も同様に、述語名詞は主語名詞より上位概念の名詞ではなければならない。

(11)「国境を越えたモンゴル側にも同じような博物館があるけれどそっちはずっと大がかりだし、展示してあるものも立派なものですよ」と案内してくれた人は言っていたけれど、後日行ってみると実際にそのとおりだった。(辺境:199)

(12)「シンガポールは面白いところよ。食事もおいしいし」(多崎:101)(= (4))

その他、国、島のように、組織、場所などを表す様々なものもある。次の例も個別の「コンゴ」と類の「国」で、述語名詞が主語名詞より上位概念の名詞が来て、形容詞と相まって「富裕な国」であると述べている。

(13)「地下資源の量から言えばコンゴは世界一富裕な国です。」(ジェノ(上):179)

では、主語名詞が一般・総称的なものの場合はどうであろうか。例えば、「駅伝、バドミントン」のような一般名詞を主語とする文であれば、それを含む上位概念の一般名詞「競技、スポーツ」が述語名詞になる。一般的な主語名詞と述語名詞の関係は、個別・具体的な主語名詞の場合と同じように、意味上、やはり包摂関係にある。

(14)「ばらばらになってき、また会うために走る。駅伝はへんな競技だ」

「うん。へんな競技だ」ふたりは静かに頷きあった。(奈緒子:168)

(15)「バドミントン? 娘はバドミントン部か」(略)「あれはかなり激しいスポーツだ。

中学生とはいえ、クラブの練習をすればくたくたに疲れる」(容疑者:142)

つまり、一般名詞というのはそれ自体が、ある個別かつ特定のものの上位の名詞である

⁷ 新屋映子(2009:34)に同じような指摘がある。(例文、下線は原著のもの)

1) a. あの子は素直だ。

b. あの子は素直な子だ。

2) a. 雪は白い。

b. *雪は白い雪だ。

2) b が不適格である理由は、主題の指示対象と述語名詞が 1) b では包摂関係にあり、2) b では包摂関係にないためであると言いき、2) a と実質的に等価であるためには、例えば「雪は白いものだ」のように、述語名詞が主題の上位語でなければならないと述べている。本稿の4.1.1節はこれをより詳しく展開、考察したものである。

が、それが主語名詞になる場合は、述語にはそれより一層上位概念の名詞が来るのである。
次のように、抽象名詞が主語になる場合には「もの」が述語名詞になる。

- (16) 「人はいろいろな別れに遭遇するものだ。(略) おまえの辛さはよくわかる。だがね、それでもわしは、人生はいいものだと思うよ。美しいものだと思う。美しいなんていうと、いまの朔太郎の気持ちにはそぐわないかもしれないが、実感としてそう思うんだ。人生は美しいとね」 (世界:201,202)

- (17) 「死は美しくなんてない。ただ悲惨で虚しいものだよ。そのことはどうしようもないじゃない」 (世界:198)

例 (16) (17) の文の主語は、「人生、死」のような抽象名詞で、これらを具体的な対象として捉え、最上位概念の名詞「もの」が述語になり、それぞれ「いいもの、美しいもの」「悲惨で虚しいもの」のように、「形容詞＋名詞ダ」全体が「合成述語」になっている。

また、主語が次のようにコト名詞や事柄を表すものの場合には、述語名詞に基本的に「こと」が来るが、場合によっては、例 (19) のように一つのモノとして捉え、述語名詞に「もの」が来ることがある。

- (18) 「わしらの世界で人が死ぬことは酷いことだなあ、朔太郎」祖父は親身な口調で言った。「死後もなく、生まれ変わることもなく、死はただの空虚でしかない。なんとも酷いことじゃないか」 (世界:198)

- (19) 「なあ朔太郎、好きな人を亡くすというのは悲しいものだ。この思いは、どんなふうにしたって形では表せない。」 (世界:57)

このように、主語名詞が一般的なものの場合には、最上位概念の名詞「こと」や「もの」が述語に来る。但し、次のように、主語名詞が個別・具体的なものの場合には、述語名詞に最上位概念の名詞「もの」が来ると不自然である。つまり、述語に来る名詞は上位概念の名詞なら何でも可能であるということではなく、主語が個別・具体的なものか、一般・総称的なものかによって、上位概念を表すものとして述語になれる名詞が異なってくると言えるだろう。

- (10)' ? 「彼女は髪の長い、物静かなものです。」

- (13)' ? 「コンゴは世界一富裕なものです」

一方、主語が一般名詞で、述語名詞に最上位概念の名詞「もの」が来る場合、述語名詞「もの」が形式化されて、感嘆・詠嘆のようなモーダルな意味を表すようになることがある。この場合、述語名詞の「もの」とモーダルな意味を表す「ものだ」と、その境界を線引きすることが難しくなる。

- (20) 「直之くんの相手のお嬢さんと、この間少し話したよ。隣町にある写真館で写真が撮ったことがあるんだとか。そこの主人は昔からよく知っていてねえ。いやあ、世間は狭いものだね。私の方がいい写真が撮れると言っておいた」(略)「写真家同士、ライバルなんですね」 (思い出:61)

4.1.2. 形容詞の意味と述語構造

本節では、前節でみた「形容詞＋名詞ダ」という述語構造と、その表す意味との関係について見てみよう。前節で述べたように、「山田先生は優しい人だ」のような構文は、実質的な意味を形容詞が担っているため、「山田先生は優しい」の形容詞述語文との互換性が高いことが多い⁸とも言える。

一方、「形容詞＋名詞ダ」という述語構造は、その全体がひとまとまりになって述語として働くため、やはり形容詞述語とは異なる。形容詞の性質や意味などによって、互換できない場合も出てくる。

まず、感情形容詞から見てみる。感情形容詞は文末の形容詞述語として用いる場合には、主語の感情を表わすのに対し、「形容詞＋名詞ダ」の述語構造に入ると、特性表現化する⁹。

例(21)を見ると、「いやだ」という形容詞は「形容詞＋名詞ダ」構造の中に入り、述語名詞「やつ」と合成述語になって、人の特性を表すようになっている。これが形容詞述語文になると、「いやだ」という感情の意味がそのまま表れる。

(21) 大晦日には借りてきたDVDを見た。(略)「こいつ、いやなやつだよ」と、俊明は主人公の権藤金吾に対してうなり声を上げる。(きみ:283,284)

(22) 「空港って、いやだね。淋しくて」(南米:23)

例(23)の「悲しい」などの感情を表わす形容詞も、同じく「形容詞＋名詞ダ」の構造の中に含まれ、人の特性を表現しており、例(24)は話し手の感情の状態を表わしている。

(23) 「なあ朔太郎、好きな人を亡くすというのは悲しいものだ。この思いは、どんなふうにしたって形では表せない。(世界:57)(= (19))

(24) 「このごろシャンプーをすると髪がたくさん抜けるの」「薬の副作用？」アキは黙って頷いた。「なんだか悲しい」ぼくは思わず彼女の手を取った。こういう場合、何と言えがいいのかわからない。(世界:137,138)

このように、形容詞が述語として用いられるか、「形容詞＋名詞ダ」の構造に入るかによって、感情を表すようになるか、特性を表すようになるかが変わり、形容詞の意味にずれが生じる。つまり、感情形容詞は「形容詞＋名詞ダ」の構造に入って、述語名詞と組み合わせると、その意味はもう既に主体の本質的な特性として表れるのである。

また、次に挙げる、「良い」のような、評価性の意味が強い形容詞も同じく、意味にずれが生じる。形容詞述語文の場合は良いか悪いかという話し手の評価が強く表れているのに対し、「形容詞＋名詞ダ」文は「良い＋人」が組み合わせあって、全体が主体の本質的な特性を述べていると言える。

(25) 「ここは悪いところじゃないと僕も思うよ。静かだし、環境も申し分ないし、レイコさんは良い人だしね。でも長くいる場所じゃない。」(森(下):184)

(25)' 「レイコさんは良い」

⁸ 新屋映子(2009:34)にも同じような指摘がある。

⁹ 西尾寅弥(1972:34)にも、「感情形容詞が連体修飾語の位置を占めるばあいには、もっと属性表現的になりやすいようである」という指摘がある。

次の例文の「いい男」を見ると分かるように、「いい人」「いい子」などのような合成述語は、形容詞「良い」以上の意味合いを持つために固定化した形で用いられるのかもしれない。

- (26) 「いい男はなに注文するか悩むだけで、絵になるなあ」(略) カウンターのうえからこの店をひとりで切り盛りしている真奈美が顔をだした。(略) 「いい男っていうから見てみたら、ほんとうにいい男だね。イモサラ、サービスするよ」
「人を見た目で差別するな」 (夜:118)

そして、形容詞が持っている、多義的な意味による場合もある。まず、「若い」という形容詞が表す意味には、絶対的に年齢が少ないという場合と、相対的に年齢が少ない場合とがある¹⁰。次の例(27)は、「私の歳と比べて、まだ若い」という、相対的な年齢の若さのことを述べており、この場合には、「平介さんはまだ若い人だ」文は用いにくい。「若い人だ」というのは、例(28)のように「年を取っていない、絶対的に年齢の少ない青年」を指しており、相対的に判断されるものではない。この場合、「若い」が結びつく名詞はほぼ人名詞に限られてくる。(相対的な基準になる文は波線)

- (27) 「平介さんはまだ若い。私の歳になるまで何十年もある。それを無理して一人で生きていくことはないです。もしそういう気になったら、誰に遠慮することなく、再婚すればいいです。その時には私も賛成しますよ」 (秘密:288)

- (28) 「おまえに頼んだ男はどこに行った。黒眼鏡の若い男だろ」 (マリア:300)

特に、次の「おわかい」は「挨拶語」としてよく用いられ、「外見が実年齢に比べて生気がある」(『現代形容詞用法辞典』(1991:601)) という意味として使用されており、絶対的に年齢が少ないという客観的な意味しか表せない「若い人だ」には置き換えられない。

- (29) 子どもの声が、下のほうからときおりあがってくる。茫とまのびした声である。
「若かったですね、ワタクシもスミヨモ」

- 「今もお若いですよ」「そういう意味ではなく」 (鞆:236)

以上、形容詞が述語に来るか、「形容詞+名詞ダ」の中に含まれるかによって、文の中で表す意味が異なるということを見た。このように両者の意味にずれが生じる場合には、「形容詞+名詞ダ」文と形容詞述語文との互換性は低いと言えよう。

以上で分かるように、「形容詞+名詞ダ」文は「形容詞+名詞ダ」全体が述語として機能しており、このような特徴は、文脈の中で「形容詞+名詞ダ」文の表す意味・機能にも繋がると考えられる。それを探るため、以下では、主語の示し方における「形容詞+名詞ダ」文の特徴を見てみることにする。

¹⁰ 『現代形容詞用法辞典』(1991:600) では、次のような例を挙げている。

・だれにもわかいときはあった。

最近のわかい人は自分の考えをはっきり言う。 (以上、絶対的に年齢が少ない場合)

・母は年の割にわかく見える。

彼とは同期だが、年は彼のほうが二つわかい。 (以上、相対的に年齢が少ない場合)

4.2. 主語の示し方に見られる特徴

例文中の主語の現れ方は下記＜表 2＞に示したとおりである。本節ではこのうち上段（網掛け部分）の例について検討する。

＜表 2＞ 総用例数

用例	形容詞述語文		「形容詞＋名詞ダ」文	
	数	割合 (%)	数	割合 (%)
主語が文中に現れる場合	485	60.5	173	39.9
主語が文中に現れない場合	317	39.5	261	60.1
合 計	802	100.0	434	100.0

4.2.1. 文中における主語の示し方

＜表 2＞の主語が文中に現れる場合、その具体的な形式はさまざまである。そして、主語は文頭に現れる場合と倒置される場合があるので、それによって分けて用例数を集計すると、＜表 3＞のようになる。

＜表 3＞ 文中における主語の示し方

主語表示		形容詞述語文				「形容詞＋名詞ダ」文			
		文頭	倒置	総数	割合 (%)	文頭	倒置	総数	割合 (%)
は		203	15	218	<u>44.9</u>	111	5	116	<u>67.1</u>
というのは ¹¹		11	1	12	2.5	14	1	15	<u>8.7</u>
も		24	－	24	5.0	10	－	10	5.8
だって		4	－	4	0.8	2	－	2	1.1
って（て）		66	2	68	<u>14.0</u>	8	－	8	4.6
Ø（無助詞）		95	29	124	<u>25.6</u>	15	5	20	11.6
なんて		22	6	28	<u>5.8</u>	1	1	2	1.1
無表示 ¹²	と	5		5	1.0	－	－	－	0.0
	たら	1	－	1	0.2	－	－	－	0.0
	けど	1	－	1	0.2	－	－	－	0.0
合計		432	53	485	100.0	161	12	173	100.0

まず、＜表 2＞の総用例数を見ると、形容詞述語文においては“主語が文中に現れる場合”が約6割を占めているのに対して、「形容詞＋名詞ダ」文の場合にはむしろ主語が文中

¹¹ 「というのは」には「ってのは/っていうのは/っていうところは」なども含まれている。

¹² 表中の「無表示」については後述。

に現れない場合が約6割である。

次に、＜表3＞の主語の示し方を見ると、「形容詞＋名詞ダ」文も形容詞述語文も「は」で提示される割合が相対的に高い。しかし、形容詞述語文で主語が「は」で提示される例は全体の半数弱に過ぎないのに対して、「形容詞＋名詞ダ」文の場合は3分の2強を占めるという違いがある。＜表2＞で明らかのように、「形容詞＋名詞ダ」文は、“主語が文中に現れる場合”の割合（39.9%）は、形容詞述語文における割合（60.5%）に比べてかなり低い。それにもかかわらず、主語が文中に現れている場合の約3分の2強が「は」に集中しているということは、両者の何らかの違いの反映とみてよさそうである。「は」で提示されないものについては、形容詞述語文では主語が「って」「なんて」で提示されたり無助詞である例の割合が高く、「形容詞＋名詞ダ」では「というのは」で提示される例の割合が高い。以上の結果からみると、二つの構文は基本的に「主題・解説」という提題構文の形式を取っており、主語の恒常的な特性を述べる文であると言える。そして、形容詞述語文には「形容詞＋名詞ダ」文に現れない「と」「たら」「けど」などをもって特性の持ち主を提示する例（「目が見えないと不便だ」のような本稿での無表示）も見られ、全体として「形容詞＋名詞ダ」文よりバリエーションがあると言える。

以下、個別の項目について検討する。「は」で示された文から見てみよう。例（30）は「形容詞＋名詞ダ」文、例（31）は形容詞述語文で、それぞれ「親切な人だ」「親切だ」と主語の特性を表している。

（30）「私はあなたの書いたものは、ひとつ残らず読んでいるわよ」

「ありがとう。君は親切な人だ」と涼平は言った。（神：195）

（31）「僕は学校行事で何度か来たことがあるんですけど、全部雨、大ハズレでした」「そうなの？でも、雨が降っても風情がありそうだから、ハズレではないと思うわ」

「奥さんは親切だなあ」（花：143）

また、「というのは」も「形容詞＋名詞ダ」文、形容詞述語文、いずれにも表れるが、「形容詞＋名詞ダ」文のほうが割合が高い。特に「形容詞＋名詞ダ」文における一般・総称的な主語名詞と「というのは」との関係が深いようである。

（32）「ああ、才能というのはたしかに時として愉快なものだ。見栄もいいし、人目も惹くし、うまくいけば金にもなる。」（色彩：83）

（33）「それにしても女性というのは恐ろしい。あれほど合理性のない、矛盾に満ちたトリックを考えつくんだからな」（聖女：423）

次に、「って」で主語を提示する場合であるが、丹羽哲也（2006：273）では、「って」は「Nがどういうものであるか改めて捉え直すという場合に用いられる」としている。形容詞述語文と結びつきやすく、特に、主語名詞が一般・総称的なものの場合によく見られる。これに関しては次節であらためて見ることにする。

（34）「ノアさんて素敵な女の子ね。わたしが男だったら、絶対に放っておかないと思う。素樹さんも手放しちゃだめよ」（真珠：72）

(35) 「日下さんて、無口やね」須賀さんのほっぺたが赤く染まっている。声がいつもより高い。ジョッキのビールはまだ半分も減っていない。(風花:319)

(36) 「うちも難産だったって聞してる。女性ってすごいよね」(彼:115)

無助詞による主語提示の例は、「って」と並んで話し言葉で広く用いられる。「形容詞＋名詞ダ」文の場合にも無助詞で示される例は見受けられるが、会話文では形容詞述語文の場合によく見られる。

(37) 「あんた、死ぬことについてどう思う？」(略) 藤田は、私を探るように上から下まで視線で舐めるようにした。それからこう答えた。「死ぬことよりも、負けることの方が怖い」(略)「千葉さん、あんた、面白い人だな」(死神:64,65)

(38) 友人夫婦は豪華な夕食を用意して待っていてくれた。(略)「ご主人、ハンサムね」

恭子の言葉に、私は「そうかなあ」と言いながら首を傾げたが、…(幸福:85)

形容詞述語文の場合、特性の持ち主を「なんて」¹³で示し、その後それについて述べる文がよく見受けられる。特に「なんて」は「すごい、素晴らしい、素敵だ、可らしい、珍しい、変だ、いい」のように評価性の強い形容詞とよく結びつく。次の例の場合、「手作りの羽子板」を「なんて」で取り上げ、「粋だ」と評価していると言えよう。

(39) 「新品なのね。どこで手に入れたの?」「実は、自作なんです」

「手作りの羽子板なんて、お正月っぽくて粋ですね」(和菓子:317)

なお、主語表示の「なんて」に関連して、「なんて」が判断根拠を示す従属節を導く場合について触れる。

(40) ロッカーから弁当を取り出して広げた。「手作りのお弁当だなんて、あなたもマメねえ」美和子がお総菜コーナーで買ってきたなり寿司をほおばりながら、真弓の弁当をのぞき込んでくる。(観覧車:128)

この場合の「なんて」はもとより主語の標識ではない。そして、形容詞述語文であれば、主節に主語が現れうる。それに対して、「形容詞＋名詞ダ」文の場合には、述語名詞によって特性の持ち主が限定されることがあるため、主語が省略されやすいと言える。次の例をみると、例(41)は、「放火した」ということから、その主体に対して「その人は酷い奴だ」と判断している文であるが、述語に「奴」が置かれ、特性の持ち主が限定される。そのため、敢えて主語を表示する必要がなくなるのではないだろうか。例(42)と比較してみるとよく分かる。このような「なんて」の用法(例(40)(41))は、<表2>と<表3>に含まれていない。

(41) 「放火なんて、酷い奴だな」私は、その場にいない犯人を非難するつもりで言った。すると春が、「そうだね、最低だよ」(重力:207)

(42) 「放火なんて物騒だよねえ」と言った。

「うちはね、別に大したことがなくて済んだけど」(重力:162)

¹³ 山田敏弘(1995:335-344)では、ナンテの一つの用法として、提題の「ハ」を強めた「～に関して言えば」「他と比較して～は」といった意味合いが感じられる、提題的用法を取り上げている。

<表3>で「無表示」としたのは次の(43)～(45)のような例である。「と」「たら」「けど」などをもって特性の持ち主を提示している例であり、このような場合は、「目が見えないと、それは結構、不便だぞ」「こんなところにいたら、それは危ないわ」「石油を使ってない石鹸を作ってみたかったんだけど、それはけっこう難しいなあ」のように、「それは」(波線)が省略されている。これは「と」「たら」「けど」で提示することで、その特性の持ち主が何かということが把握できるため、特に主語が必要ではないと思われる。これらのような形式は、「形容詞+名詞ダ」文には用いられにくい。

- (43) 「今、何をやってるんですか」私は口を挟む。「パソコンの勉強だよ。それと、生活の勉強だ」「何ですかそれは」「何にも見えなくなっちゃったから、赤ん坊の頃に戻って、やり直してるんだ。落ち込んでる暇はねえからだ。渡辺、知ってるか？
目が見えないと結構、不便だぞ」 (モダン(上):56)

- (44) 車を路肩に寄せ、ウインカーを点滅させたまま降りてみた。五十メートルほど引き返した路面に、一人の少女がうずくまっていた。(略)「とにかく車に乗りなさい。こんなところにいたら危ないわ」「ほっといて」 (雨:220)

- (45) ゴム手袋をつけた俊明は、失敗に終わった石鹸未満の溶液を処分する。「石油を使ってない石鹸を作ってみたかったんだけど、けっこう難しいなあ」(きみ:280)

最後に、会話文では特性の持ち主が述語の後に来る文が見られるが、本稿では倒置形式として分類した。「形容詞+名詞ダ」文、形容詞述語文、いずれにも見られるが、形容詞述語文のほうが多く見られる。形容詞述語文の場合、文末に来る特性の持ち主は、「は」などを伴う場合もあるが、無助詞で現れることが特に多い。

- (46) 「あ、お星様が綺麗」(略)「良いわね、やっぱり田舎は……。」 (カクレ:66)

- (47) 「ほんとうに意地が悪いよ、健ちゃん。なんで黙って見てるの」 (きみ:68)

- (48) ボールを蹴り、健太郎が近づいてきて、二人でベンチに腰を下ろした。

「上手いね、お兄ちゃん」「君も上手いよ。」 (グラス:135)

一方、「形容詞+名詞ダ」文は、基本的に倒置形式で用いられる場合が少なく、その際には、無助詞より「は」などを伴うことが多い。例(49)は無助詞で、例(50)は「は」で、例(51)は「というのは」で示している。

- (49) 「いくつ？彼。」「今、十一かな。」(略)「かわいい子ね、弟さん。ハンサムになるわよ。」さ世子が笑った。 (アム(下):52)

- (50) 直貴は俯き、首の後ろを搔いた。「汚い男だよな、俺は」
「直貴君は本当はそんな人やないのに……」 (手紙:266)

- (51) 「子供が幼稚園に入って、私はまた少しずつピアノを弾くようになったの」とレイコさんは話しはじめた。「誰のためでもなく、自分のためにピアノを弾くようになったの。(略) 素晴らしいことよ、自分自身のために音楽が演奏できるということはね」 (森(上):248)

以上のように、主語の示し方において、「形容詞+名詞ダ」文は「は」で示されるもの

に偏っているのに対し、形容詞述語文のほうは半数以下に過ぎない。形容詞述語文はそのかわり、無助詞、「って」が占めるなど、全体として、「形容詞＋名詞ダ」文よりも主語の示し方のバリエーションが豊かだと言える。次節では以上の結果をもとに、主語名詞とその示し方における両形式の特徴について、さらに詳しく見ることにする。

4.2.2. 主語の示し方と主語名詞との関係

前節で述べた結果を、さらに主語名詞が個別・具体的なもののか、一般・総称的なものかに分けて、主語表示との関係を見てみると、二つの形式に少し違いが見られる。まず、主語名詞別の用例の割合は次の通りである。

<表 4> 主語名詞別の用例数

主語が文中に現れる場合		形容詞述語文		「形容詞＋名詞ダ」文	
		数	割合 (%)	数	割合 (%)
主語 名詞	個別・具体的なもの	388	80	135	78
	一般・総称的なもの	97	20	38	22
合計		485	100.0	173	100.0

そして、主語名詞別の主語の示し方について、個別・具体的な主語名詞は<表 5>、一般・総称的な主語名詞は<表 6>のような結果を得た。

<表 5> 個別・具体的な主語名詞

主語表示		形容詞述語文				「形容詞＋名詞ダ」文			
		文頭	倒置	総数	割合 (%)	文頭	倒置	総数	割合 (%)
は		166	11	177	<u>45.6</u>	95	5	100	<u>74.1</u>
というのは		2	-	2	0.5	4	-	4	<u>3.0</u>
も		18	-	18	4.6	6	-	6	4.4
だって		2	-	2	0.5	2	-	2	1.5
って (て)		32	2	34	<u>8.8</u>	3	-	3	2.2
Ø (無助詞)		94	28	122	<u>31.4</u>	14	5	19	14.1
なんて		20	6	26	<u>6.7</u>	-	1	1	0.7
無表示	と	5		5	1.3	-	-	-	0.0
	たら	1	-	1	0.3	-	-	-	0.0
	けど	1	-	1	0.3	-	-	-	0.0
合計		341	47	388	100.0	124	11	135	100.0

<表 6> 一般・総称的な主語名詞

主語表示	形容詞述語文				「形容詞＋名詞ダ」文			
	文頭	倒置	総数	割合 (%)	文頭	倒置	総数	割合 (%)
は	37	4	41	<u>42.2</u>	16	-	16	<u>42.1</u>
というのは	9	1	10	10.3	10	1	11	<u>29.0</u>
も	6	-	6	6.2	4	-	4	10.5
だって	2	-	2	2.1	-	-	-	0.0
って (て)	34	-	34	<u>35.0</u>	5	-	5	13.2
∅ (無助詞)	1	1	2	2.1	1	-	1	2.6
なんて	2	-	2	2.1	1	-	1	2.6
合計	91	6	97	100.0	37	1	38	100.0

以上を見ると、<表 5>に示してあるように、形容詞述語文は主語名詞が個別かつ特定のものの場合、「は」の他に無助詞で示すことが多い (31.4%)。

- (52) 「コピー機もってきて」「は？コピーですか」思わず聞き返した半沢に、「聞こえなかった？あんた耳遠いね。コピー機だっていったの。コピー機」(入行組:130)
- (53) 「あれ、こんなのあったっけ」「ずっとあったわよ。新作だって熊谷さんが持ってきてくれたの」(略)「へえ」と言ってペンギンを手に載せた。「はは、ちゃんと立つ。あいつホントに器用だなあ」(きみ:221)

丹羽哲也 (2006:298-299) によると、「無助詞は総称名詞句に表れにくく、眼前描写や経験に基づいた叙述に無助詞が現れる」とし、これには無助詞の現場的性格というものに関与していると述べている。本稿の調査でも、無助詞は個別・具体的な主語名詞とよく結びつき、特に形容詞述語文によく見られ (31.4%)、このような結果は形容詞述語文の現場的な性格をよく見せているのではないと思われる。

一方、主語名詞が一般的なものの場合は、無助詞で表れることはほとんどない (2.1%)。本稿で採集した用例のうち、一般的な主語名詞を無助詞で示した例には、次のような倒置形式の例がある。例 (54) のように指示詞を含む場合には、無助詞で示しうるのである。

- (54) 松本は体を戻すと、週刊誌を取り上げた。「夜の街でご乱行、か。神埼先生、何をおやりになったんですか……」松本は、二つの顔の影が重なっている写真を見ながら、「そうだよねえ、くつついていなくても、くつついているように写せるよねえ」とつぶやきながら、またニヤニヤしている。「怖いねえ、この世の中。」(昏睡:392)

だが、その他の殆どの一般・総称的な主語名詞の用例は、無助詞の代わりに「は」(42.2%) や「って」(35%) で示すことが多い。例 (56) (57) のように主語を「って」で示す場合には、それに対する話し手の評価がよく表れている。

(55)「現代文学を信用しないというわけじゃないよ。ただ俺は時の洗礼を受けてないものを読んで貴重な時間を無駄に費やしたくないんだ。人生は短い」(森(上):66)

(56)「私も子供を作るつもりでしたし、すぐに出来ると思っていたものですから、その約束について、それほど深刻には考えていなかったんです。だけどまさか、一年近く経っても出来ないなんて……。神様って残酷ですよ」(聖女:258)

(57)「何を見ているんですか」と訊ねると、彼女は泣いていた跡も隠さずに、「外にいる、主人を」と答えた。確かに、そこから、埋められた田村幹夫の膨らみが見えた。「どうしてこんなことに」「世の中って理不尽ですよ」(死神:121)

これに対し、「形容詞＋名詞ダ」文の場合、主語名詞が個別・具体的なものの場合は、「は」で表すことが圧倒的に多く(74.1%)、一般・総称的なものの場合は、「は」の他に「というのは」などで示すことが多い(29%)。丹羽哲也(2006:251)では、述部が属性を表すと言える例では、「って」と「というのは」はほぼ同じであるとしているが、本稿で「形容詞＋名詞ダ」文と形容詞述語文とを比較した結果では、<表6>に示したように、主語が一般的な名詞の場合、「って」は形容詞述語文に多く現れ(35%)、「というのは」は「形容詞＋名詞ダ」文によく現れる(29%)傾向があるということを確認した。これは、両形式の述語構造の違いによるものと考えられる。つまり、文脈の中での二つの構文の機能が異なるとも言えそうである。

(58)「銀行ってところは、つくづく理不尽な組織だな」半沢は嘆息した。「いまごろ気づいたか。それじゃあ、もう一つ教えてやろう。銀行ってところはな、情け容赦も血も涙もない組織なんだよ。」(入行組:166)

(59)「一字も読まずに焼いてしまうとナカタはサエキさんに約束いたしました。約束をまもるのはナカタの役目であります」

「うん、そうだ。約束を守るってのは大事なことだ」(海辺(下):388)

このように、一般・総称的なものが主語名詞になる場合、「形容詞＋名詞ダ」文は「というのは」などの標識と関係が深い。それは次の例からも確認することができる。例(60)の場合、文脈上「支店長」は竹中支店長という個別主体を指しており、述語名詞に「人」が置かれている。即ち、「竹中支店長は謙虚な人ですね」と言っているのである。一方、この文の述語名詞「人」を「もの」に置き換えると、主語名詞を一般・総称的なものとして捉えることができる。この場合、主語の標識のほうも「というのは」に置き換えて示すほうが自然に感じられる。

(60) 山本は、工藤の電話の内容を聞いて、いきり立った。「工藤って、本物の莫迦じゃないですか。竹中支店長に助けてもらったことを忘れて、焼き餅をやくなんで、どうかしてますよ。ジェラシーも分からなくはありませんが、そこはぐっと堪えて、褒めるぐらいの余裕がなければおかしいんです」(略)「冷汗三斗とか穴があったら入りたいとか、支店長は謙虚な人ですね」(消失(上):565)

(60)' ?「支店長は謙虚な人ですね」